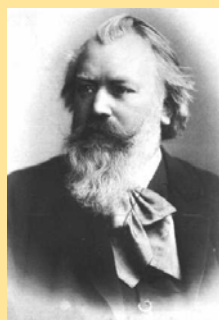


日本ブラームス協会 (JBS since 1973) No.150 例会
ヤマハ銀座店共催 「ブラームスを語るシリーズ(9)」

日本ブラームス協会45周年記念

「中井恒仁 ブラームスを語る」



2018年5月27日(日) 2pm

会場 ヤマハ銀座店(7丁目) 6F サロン

後援 ハンブルク国際ブラームス協会、 アメリカブラームス協会
共催 (株) ヤマハミュージックリテイリング 銀座店
主催 日本ブラームス協会 (Japan Brahms Society since 1973)

■ 演奏		(予定時間)
●プレトーク	／ ブラームスのピアノ曲について 西原 稔	(15)
●ブラームス	／ 4つのピアノ小品 Op. 119 より 第1曲 第2曲	
●ブラームス	／ ピアノソナタ 第3番 ヘ短調 Op. 5	(60)
	ピアノ 中井恒仁(桐朋学園大学教授)	
	—————休憩—————	(20)
■ 講演 「中井恒仁 ブラームスを語る」		(50)
	講演と監修 西原 稔(JBS 顧問 桐朋学園大学教授)	

曲目解説

西原 稔

■「4つの小品集」 作品119

第1曲「間奏曲」 アダージョ ロ短調 8分の3拍子

この第1曲はブラームスの後期のピアノ作品の傑作に数えられる。嬰へ音から3度下行する分散和音で始まり、淡く主音を包み込む悠遠な音楽である。また第1曲はクララに「灰色の真珠」と形容させる強い衝撃を与えた。主題は3度下行の動機からなる作品で、和声の中心をなす和音は意図的に隠されていて、あたかも調性を失ったかに感じられる。ブラームスは1893年5月の手紙でクララにこのように書き送っている。

この作品は3度の下行で開始する。第1小節は最高音イ音から最低音ホ音までの音列をなし、一見すると4度の11

私は、貴女がこのピアノ小品をどのようになさるのか知りたくて、これを書き送りたい気持ちになりました。この作品は不協和音で満ちています。私はこれらの不協和音はふさわしいと思いますし、説明することが出来ます。でも貴女はその趣味をお好きではないでしょう。・・・この小品はとりわけメランコリックで、『とてもゆっくりと演奏する』といっても過言ではありません。あたかも人々は皆それぞれメランコリーを吸収したがつているかのように、どの小節もどの音も、あの不協和音から発する放縦さと満足をもって、ゆったりと響かさなければなりません。

の和音に見えるが、ロ短調の主和音である。この3度下行の表現をすでに「ピアノ・ソナタ第3番」の第2楽章で明瞭な形で用いていた。この作品では導音の嬰イ音の使用をできるだけ回避して、調性を多義的にしている。中間部はニ長調であるが、さまざまな細かな和声を駆使し、ブラームスの音の表現の極致と言える。

第2曲「間奏曲」 ホ短調 4分の2拍子

右手と左手は半拍ずれた和声進行を行い、そのために盾の響きでは多様な非和声音が発生し、どこか虚ろな印象を醸し出している。中間部はホ長調の「アンダンティーノ・グラツィオーソ」で、主音のホ音がバスで繰り返し奏され、安定した雰囲気を作り出している。

■ピアノソナタ第3番 ヘ短調 作品5

ピアノ・ソナタ第3番は、それまでの2曲のソナタの経験を踏まえて、1854年に作曲された。この作品で彼はこれまで例を見ない5楽章の構成を採用した。彼が「5楽章」の構成を採用した背景についての確証はないが、シューマンが同じヘ短調の「ピアノ・ソナタ第3番」を当初、5楽章構成で作曲したと無関係ではないかもしれない。この作品はブラームスにとって作曲の学習の集大成という意味を担っており、ベートーヴェンのとりわけ「ピアノ・ソナタ第23番《熱情》」（作品57）のほかにシューマンの上記の「ピアノ・ソナタ第3番」（作品14）を土台としており、第3楽章のスケルツォではメンデルスゾーンの「ピアノ三重奏曲 ヘ短調」（作品66）の終楽章から主題を借用している。

シューマンの後押しによって音楽の世界で認められ、彼の作品が出版の運びとなったことにブラームスは言葉では言い表せない感動を覚えた。ブラームス作曲と書かれた自作品の出版譜を手にして、シューマンに感謝の手紙をしたためる。

勝手ながら、あなた様にあなた様の最初の養い児を同封させていただきました。・・・これらの作品は新しい服をまとして、私にはあまりに上品ぶって決まり悪そうにしているように見えます。——ほとんどペリシテ人のです。私はまだ、生まれたままの無垢な子供がこのようなきちんとした新しい服をきているのを見るのにまだ慣れることができないであります。

作品は第3楽章（スケルツォ）を中心にしたシンメトリックな構成をとり、第1楽章と第5楽章、第2楽章の楽想と第4楽章が対を成し、イーダ・フォン・ホーエンタール伯爵夫人に献呈された。

第1楽章 アレグロ・マエストーソ、ヘ短調、4分の3拍子

バスがヘ音からハ音へと半音階的に下降し、上声部と内声部は反進行による基礎動機を提示し、ソプラノは高いヘ音を目指して跳躍進行で上向して、堂々とした第1主題を提示する。それに続いて、第7小節からバスが3連符で「ハート音」の五度音程の2和音を連打するなかで、上記の基礎動機がppで重苦しく奏され、フェルマータで一区切りをなす。この同音連打の表現はベートーヴェンのピアノ・ソナタ第23番「熱情」の第1楽章の表現を背景にしている。続いて、ユニゾンで力強い動機が奏される。この動機は、シューマンがピアノ・ソナタ第3番ヘ短調の第1楽章で用いた基礎動機である。この動機の後、冒頭の主題の確保に移る。第2主題は穏やかな変イ長調で、第1主題と対照的である。

第2楽章 アンダンテ・エスプレッシヴォ、変イ長調、4分の2拍子

この作品の冒頭にはシュテルナウの詩が掲げられている。冒頭では3行のみの詩句が引用されているが、その全文は以下のとおりである。

夕暮れが迫り、月が輝いている
その時、愛する二人の心は一つになる
そしてふたりは陶然として抱きあう
風がそよぎ、風音をたてる
バラの花がその香りをふりまき、
天使たちがやってきたかのようだ

僕ははじめてあなたにキスをする
あなたに数知れぬほどキスをする
僕は繰り返しあなたにキスをする
あなたの頬に長く
至福の涙がとどめなくこぼれる
真珠が落ちるように

時はすぎて、朝日が輝く
それでもまだ僕たちは愛の中でひとつ
そして陶然として抱きあう
風がそよぎ、風音をたてる
バラの花がその香りをふりまき、
天使たちがやってきたかのようだ

この非常に官能的で抒情的なこの詩を若きブラームスは彼のノート「私のオリエン트 Mein Orient」に書き記していた。シューマンは「幻想曲」の冒頭にF. シュレーゲルの詩を掲げており、作品の冒頭に詩を掲げるのはシューマンの影響によると思われる。

この楽章では右手の上声部は3度下降が連続する表現を用いている。この3度の連続下降の表現は彼の後期の表現の特徴であるが、すでにこの時期にこの表現が用いられている点が注目される。楽章は3つの部分からなり、中間部分（変ニ長調、16分の4拍子）は二人の対話を思わせる甘美な表現である。この主題は、ジルヒャーによる創作民謡《私は暗い真夜中に歩哨に立つ》の主題を背景としていと考えられ、旋律の骨格は共通である。この歌曲は、1843年刊の『教養ある読者のための朝刊紙』に作品案内が掲載され、ブラームスは早い時期からこの作品を知っていたと思われる。なお、この旋律は「ピアノ協奏曲第1番」のヘ長調の第3主題の旋律とも類似している。

第3楽章 アレグロ・エネルジーコ、スケルツォ ヘ短調 4分の3拍子

このソナタの中心に位置する楽章である。スケルツォであるが、重々しいワルツを思わせる表現である。この主題は、メンデルスゾーンのパiano三重奏曲第2番ヘ短調（作品66）の第4楽章の主題の借用である。2小節のゲネラル・パウゼを挟んで中間部に入る。変ニ長調のこの中間部はコラールを思わせる和音書法で書かれており、弱音が支配する。

第4楽章 アンダンテ・モルト、ヘ短調、4分の2拍子

「間奏曲」と題され、副題として「回想」と記されている。第2楽章の3度下降の動機が回想されるとともに、左手の低音で3連符による同音連打が繰り返し奏され、第1楽章もまた回想される。この同音連打もベートーヴェンのピアノ・ソナタ「熱情」第1楽章の同音連打を連想させる。

第5楽章 アレグロ・モデラート・マ・ルバート、ヘ短調 8分の6拍子

第1楽章と対を成す楽章で、ロンド形式で構成されている。最初の2小節と第3、4小節の動機はあたかも対話しているかのようである。第1楽章の冒頭で用いられた「基礎動機」がこの楽章でも用いられている。最初のクプレ（中間部）はヘ長調で歌曲を思わせる。変ニ長調で主部が回帰した後、第2のクプレはコラールを思わせる和音書法である。最後はピウ・モッソでテンポを速めて、交響曲を思わせるような壮大な和音で全体を締め括る。

●中井 恒仁（ なかい のぶひと ） ゲスト

東京芸術大学附属音楽高校、同大学、同大学院、ミュンヘン国立音楽大学大学院（マイスタークラス）修了後、ザルツブルグ・モーツァルテウム国立音楽大学にて研鑽を積む。ドイツ留学中 DAAD の奨学金を得る。イタリア・ポジターノにて W・ケンプ文化財団のオピッツ氏によるベートーヴェンの講習会に招聘参加。

ピアノを、渡辺洋子、戸沢盛男・睦子、梅谷進、植田克己、ゲルハルト・オピッツ、カール＝ハインツ・ケンマーリンクに、ピアノデュオをアルフォンス・コンタルスキーに、歌曲伴奏法をヘルムート・ドイチュ、ドナルド・ズルツェンの各氏に師事。

日本音楽コンクール第3位。J・ブラームス国際音楽コンクール第2位、また、4部門の上位入賞者によるガラコンサートにて、聴衆賞。セニガリア国際ピアノコンクール第1位、あわせて、室内楽賞及びアリア・歌曲伴奏賞。ヴィオッティ国際音楽コンクール（ヴェルチェリ）第3位、プラハの春国際音楽コンクール、ディプロマ。マヴィ・マルコツ国際ピアノコンクール最高位。マレー・ドラノフ国際2台ピアノコンクール第4位。

ブラームス：協奏曲第1番をクロアチア放送響、プロ・アルテ・マルケ響（伊）と、第2番をRAI イタリア国立放送響、ククロヴァ・デヴレット響（トルコ）、内藤彰指揮・東京ニューシティ管、山下一史指揮・桐朋オーケストラアカデミー、松尾葉子指揮・芸大フィルと協演。特に、東京ニューシティ管定期では、その信頼から急遽数日で代役を務め、話題を呼んだ。

イタリアにて W・ケンプ生誕 100 周年記念・ベートーヴェンピアノ協奏曲全曲演奏会出演、G・ベルティーニ指揮、東京都交響楽団とのチャイコフスキー、他にラフマニノフ、リスト等をオーケストラと協演。

ブラームスピアノ作品（ソロ、2 台ピアノ、連弾）全曲シリーズや、イタリアでの 3 夜連続ソロリサイタル、アメリカでの 3 日連続ピアノデュオリサイタルなど、これまでに日本、ヨーロッパ、アメリカで演奏会を行う。ソロ、室内楽、歌曲伴奏、NHK-BS テレビ「名曲探偵アマデウス」「ぴあのピア」などテレビやラジオの出演、日本フィルのシリーズコンサート出演、音楽祭の参加、音楽誌「ショパン」への連載や表紙を飾るなど幅広く活動。チャリティコンサートや、社会福祉施設への訪問コンサートも数多く行っている。また、夫人・武田美和子とのピアノデュオは、「国際音楽コンクール世界連盟 WFIMC」加盟コンクールにそれぞれのソロとデュオ共に入賞している唯一の邦人デュオで、活発な活動をしている。いずれのジャンルでも、誠実に深い音楽に定評がある。近年は、フランスのボルドー音楽祭やドイツでの定期コンサートを含むリサイタルツアーに招聘され、新聞紙上でも絶賛された。今年はロンドンのリサイタルも予定されている。フコク生命パートナーアーティスト。2014 年には、「久留島武彦文化賞」受賞。

ソロの CD「ブラームス」、ピアノデュオの CD「新世界より&スラヴ舞曲集」「ファンタジー」「ブラームス：ハンガリー舞曲集&ワルツ集」「ラフマニノフ：組曲」、「モーツァルト」をリリース。レコード芸術誌特選盤の 2 枚の CD が 2015 年と 2016 年に ANA 国際線機内オーディオ番組にて放送される。

これまで、パリ・エコール・ノルマルでのマスターコース、MusicAlp 国際音楽アカデミー（フランス）や Jirisan 国際音楽フェスティバル（韓国）の指導と演奏、ミュージックセミナー in ゆうばりを始め、講座やコンクールの審査、アドバイスレッスン等、教育面においても力を注いでいる。現在、桐朋学園大学ピアノ科主任教授、名古屋音楽大学客員教授。



(C)Toshiaki Yamada

●西原 稔（ にしはら みのる ） JBS 顧問

東京芸術大学同大学院音楽研究科博士課程満期退学。現在桐朋学園大学教授。19 世紀音楽と音楽社会史を専門とする。著書は「音楽の社会史」（音楽之友社）、「聖なるイメージの音楽」（音楽之友社）、「ピアノの誕生」（講談社）、「＜楽聖＞ベートーヴェンの誕生」（平凡社）、「音楽史ほんとうの話」（音楽の友社）、「ブラームス」（音楽の友社）。その他翻訳、監修など。ブラームス研究と並んで、シューマンのピアノ作品の成立史の研究成果が「シューマン 全ピアノ作品の研究」上下として 2013 年音楽之友社より出版され、2014 年第 26 回 ムジック・ペンクラブ音楽賞をクラシックの研究・評論部門で受賞する。日本ブラームス協会（JBS）では顧問として企画運営のアドバイスをするとともに「レクチャー&コンサート」を担当して、その成果を年会誌『赤いはりねずみ』に発表している。



中井恒仁《ブラームスピアノ曲・全曲リサイタル》

JBSは毎年「後援コンサート」として年会誌「赤いはりねずみ」に記録致しました。

中井恒仁 ブラームス ピアノ全曲シリーズ (日本ブラームス協会 後援コンサート)



会誌 32 号 2004 掲載

♪ 2004年11月8日 (月) 午後7時 「中井恒仁のブラームス 第1回」
東京文化会館小ホール

- ブラームス 自作の主題による変奏曲 Op.21-1
- ブラームス ハンガリーの歌による変奏曲 Op.21-2
- ブラームス ワルツ集 愛の歌 (連弾) Op.52a
- ブラームス ピアノソナタ第3番 ヘ短調 Op.5

Pf: 中井恒仁、武田美和子



会誌 33 号 2005 掲載

♪ 2005年11月14日 (月) 午後7時 「中井恒仁のブラームス 第2回」
東京文化会館小ホール

- ブラームス 8つの小品 Op.76
- ブラームス パガニーニの主題による変奏曲 Op.35 第1集
- ブラームス 2台のピアノのためのソナタ ヘ短調 Op.34bis

Pf: 中井恒仁、武田美和子



会誌 34 号 2006 掲載

♪ 2006年11月15日 (水) 午後7時 「中井恒仁のブラームス 第3回」
東京文化会館小ホール

- ブラームス / 2つのサラバンド
- ブラームス / ピアノソナタ 第2番 嬰ヘ短調 Op.2
- ブラームス / 3つの間奏曲 Op.117
- ブラームス / シューマンの主題による変奏曲 変ホ長調 Op.23 (連弾)

Pf: 中井恒仁、武田美和子



会誌 36 号 2008 掲載

♪ 2008 年 11 月 10 日 (日) 午後 7 時 「中井恒仁のブラームス 第 4 回」
東京文化会館小ホール

- ブラームス / 主題と変奏 ニ短調 「弦楽六重奏曲 第 1 番 Op.18」
第 2 楽章のピアノソロ版 (ブラームス編)
- ブラームス / 幻想曲集 Op.116
- ブラームス / ハンガリー舞曲集 (連弾共演: 武田美和子)



会誌 37 号 2009 掲載

♪ 2009 年 11 月 18 日 (水) 午後 7 時 「中井恒仁のブラームス 第 5 回」
東京文化会館小ホール

- ブラームス / バラード Op. 10
- ブラームス / ワルツ集 Op. 39 (連弾)
- ブラームス / ヘンデルの主題による変奏曲 Op. 24
Pf. 中井恒仁 武田美和子 (連弾)



会誌 39 号 2011 掲載

♪ 2011 年 11 月 21 日 (月) 午後 7 時 「中井恒仁のブラームス 第 6 回」
東京文化会館小ホール

- ブラームス / シューマンの主題による変奏曲 嬰へ短調 Op. 9
- ブラームス / ピアノソナタ No. 1 ハ長調 Op. 1
- ブラームス / 大学祝典序曲 連弾版 Op. 80
- ブラームス / ロシアの思い出 連弾版
連弾 中井恒仁 武田美和子



会誌 40 号 2012 掲載

♪ 2012 年 11 月 14 日 (水) 午後 7 時 「中井恒仁のブラームス 第 7 回」
東京文化会館小ホール

- ブラームス / 2つのラプソディー Op. 79
- ブラームス / パガニーニの主題による変奏曲 Op. 35 第 2 集
- ブラームス / ワルツ集「新・愛の歌」Op. 65a (連弾)
- ブラームス / 6つのピアノ小品 Op. 118
Pf. 中井恒仁 武田美和子 (デュオ共演)



会誌 42 号 2014 掲載

♪ 2014 年 11 月 13 日 (木) 午後 7 時 中井恒仁のブラームス 第 8 回 最終回
浜離宮朝日ホール

- ブラームス / スケルツォ 変ホ短調 Op. 4
- ブラームス / 弦楽六重奏曲 1 番 変ロ長調 Op. 18 (ブラームスによる連弾版)
- ブラームス / 4つの小品 Op. 119
- ブラームス / ハイドンの主題による変奏曲 Op. 56b (2 台ピアノ)
Pf. 中井恒仁 武田美和子 (デュオ共演)

